

公文部
第七函
第五一號
一冊

渡邊洪基松島之議

清水



松島之議

松島ト竹島即チ韓名蔚陵島ハ聞ク牙ニ倚ルニ
 一島ニ名ナルカ如シトイヘ氏曰鳥取縣令ニ聞
 クニ全ク二島ノ由ヲ認メ又戸田菴義カ藏書金
 森録ナル人ノ書ニ隱岐國松島西島松島ノ一小
 属島ナリト
 呼テ次ヨリ海上道規凡ソ四十里許北方ニ一
 島ト云アリ名ヲ竹島ト云フ云々又伯列米子ヨリ竹
 島迄海上道程百四十里許アリ米子ヨリ出雲ニ
 出テ隱岐ノ松島ヲ經テ竹島ニ到ルナリ但レ隱

外務省

夕承以

夕 承 以

岐ノ福島福浦一名ヨリ松島迄海上道程六十里許松
 島ヨリ竹島迄四十里許云々又竹島ヨリ朝鮮へ
 海上道規四十里許ト云此説ハ享保九年昔屢渡海
 セル一老叟ニ詰問セラレシ時其答ニ伯列會見
 郡濱野目三柳村ヨリ隱岐ノ後島へ三十五六里
 アリ此遠見ノ考ヲ以テ竹島ヨリ朝鮮山ヲ見レ
 ハ少シ遠ク見レハ凡ソ四十里許リト云フニ因
 ル云々是ソ以テ考ユレハ二島アル事瞭然タル
 カ如シ洋書ニ就テ據スルニ英ノインペリヤー
 ルガセツトルニクダビラト音スダケレツト島即松島ハ日本海

ノ一島ニシテ日本島ト朝鮮半島ノ間ニアリ其
 西北點北緯三十七度二十五分東經イダリオンチ
 等ノ百三十度五十六分一千七百八十七年ラペル
 ーズノ名クル呼同因九里海岩ハ絶壁之ヲ境シ
 其最高處ニ至ルマテ樹木森々タリ又リソピン
 コワト著プロナラシメンダガセツテルヲフゼ、
 ヲール、ドニクダゼラハ日本海ノ小島ニシテ
 日本朝鮮ノ殆ント中間ニアリ周圍八里北點北緯
 三十七度二十五分東經百三十度五十六分トア
 リ之ヲ地圖ニ徴スルニ英海軍測量圖ニ載スル

外 務 省

牙ダセラ即チ松島ト題セル者其地位ニ書ニ載
 スル所ノ如シ英ノロヤールアトラス佛ブル
 正ノ大図英女王地理家ゼイムスウイルドノ日
 本朝鮮図日耳曼ヲイペルス亜細亞図千八百七
 十五年ゴツタノスチールスノアトラスウアイ
 マル、地理局ノ図皆ナ同地位ニダセラ島ヲ置
 キ英測量図ニハ點線以テ限ルモノ、外ハ東經
 百二十九度五十七八分北緯三十七度五十分ニ
 アルゴナウト即チ竹島ト題シタル者ヲ置ク魯西
 亞ノ地圖局ノ図ニモ同處ニ之ヲ艦カニ置ク又

夕 務 省

金森謙ノ書ニ竹島周圍大凡十五里ニアリ又戸
 田敬義ノ図和船ノ測量ヲ総斗スレハ二十三里
 餘トナル右由屈出入ヲ合セ沿岸去レハ彼松島即チ夕セラ
 島ノ周圍ト異ナル事少々ナラス而シテ図中南
 隅ニ一里半周圍ノ一島ヲ載ス是千入島ナルベ
 シ真図ニ就テ測量スルニ隱岐嶋ヲ松島竹島朝
 鮮ノ距離凡ソ符合スサレハ松島竹島ノ二島ナ
 ルハ殆ント判然タリ唯我國ノ書ニ竹島ノ事ノ
 ミ多クシテ松島ノ事ナキハ大小負富ノ差ヨリ
 竹島ニ往來スルノミニシテ且朝鮮トノ爭論モ

外 務 省

竹島ニノミ関係シタル故ト思ハル、此島ノ外國
 認ルル処ヲ因ニ徴サレハ英國ノ諸國ハ對馬島
 ト合セテ朝鮮ノ色トシ佛モ亦同シ日耳曼ゴタ、
 スチーレルスノ因ニハ對馬ト合セテ日本色ト
 シ唯ウアイマルノ地理局因ノミ對列ヲ以テ日
 本色トシ松島竹島ヲ朝鮮色トス英佛ノ對列ヲ
 合セテ朝鮮色ニセシハ對列既ニ日本版圖ニ相
 違ナケレハ隨テ松島竹島モ其色ヲ変セン即チ
 スチーレルノ因ハ此結果ナルベシ況ンヤ松島
 竹島ヲ以テ傳フ其語ハ日本語ナリ因テ考フレ

夕
 種
 山

ハ此島ハ暗ニ日本所屬ト見做シタルナルヘシ
 借我國ト朝鮮トノ關係ヲ論スレハ曰幕府無事
 ヲ好ムヨリ竹島ヲ以テ唯彼地圖ニ蔚陵島ト均
 シキト其地ノ遠近ヲ以テ朝鮮ニ讓與セリト雖
 トモ松島竹島ニ島アリ松島ハ竹島ヨリ我近キ
 方ニアレハ日本ニ屬シ朝鮮又異論アル能ハス
 而シテ其緊要ヲ論スレハ同島ハ殆ント日本ト
 朝鮮ノ中間ニ位シ我山陰ヨリ朝鮮咸鏡道永興
 府即チラサレノ港トノ航路ニ當リ長崎ヨリウ
 ラシラストツク港船舶必ラス近ツク可緊要ナ

外
 務
 省

ル可謂竹島ニ數倍ス故ニ今英魯等ノ類リニ注
目スル可トナレリ而シテ各國ノ認ムル可是ノ
如シ然ルニ我國ニテハ松島竹島ニ島一峙ノ事
判然ナラス隨テ朝鮮ニ屬スル哉否ヲモ知ラサ
ルナリ若シ外國ノ問ニ達フ又答フル可ヲ知ラ
ス若我物トセン歟之ニ関スル義務ナカルヘカ
ラス之ヲ朝鮮ニ歸セン歟又外國ニ注意セサル
ヲ得ス是再考スル所以ナリ

渡邊洪基述

松嶋之議

昔者竹嶋ノ記事略説多クシテ松嶋ノ事説論ス
ル者ナシ而テ今者人松嶋ニ喋々ス然リ而テ此
二嶋或ハ一嶋兩名或ハ二嶋也ト諸説紛々朝野
其是非ヲ決スル者ヲ聞カス彼竹島ナル者ハ朝
鮮ノ蔚陵島トシ幕府偷安ノ議遂ニ彼ニ委ス故
ニ此所謂松嶋ナル者竹嶋ナレハ彼ニ屬シ若竹
嶋以外ニ在ル松嶋ナレハ我ニ屬セサルヲ得サ
ルモ之ヲ決論スル者無シ然ルニ松嶋ナル者我

外務省

國ト朝鮮トノ間ニ位シ長崎ヨリ浦潮港ニ至リ
 馬関其他石列因列伯列穂波ヨリ彼要地タルラ
 ガレフ港ヘノ道ニ當ルヲ以テ頗ル要地ト為シ
 連綿此近傍ニ英魯其船艦ヲ出沒ス若シ夫我國
 ノ部分ナラシニハ之ニ多少ノ注意無ル可ラス
 彼國ナラシ軟又保護ヲ加ヘサル可ラス況ンヤ
 他國我ニ亂ス之ニ答フルニ決辭ナキヲ如何セ
 ン然ラハ則無主ノ一島ノミ諸書ニ就テ案スル
 ニ竹嶋洋名アルゴナウト嶋ナル者ハ全ク島有
 ノ者ニシテ其松島デラセ嶋ナル者ハ本表ノ竹

夕霧

嶋即チ蔚陵嶋ニシテ我松嶋ナル者ハ洋名ホル
 子ツトロツクスナルカ如シ然ルヲ洋客竹嶋ヲ
 認テ松嶋ト為シ更ニ竹嶋ナル者ヲ想起セシ者
 ノ如シ而テ誤ホル子ツトロツクスノ我國ニ屬
 スルハ各國ノ地圖皆然リ他ノ二嶋ニ至リテハ
 各國其認ムル所ヲ同フセス我國論又確據無シ
 是實ニ其地ノ形勢ヲ察シ其所屬ノ地ヲ定メ而
 テ其責ニ任スル所ヲ兩國間ニ定メサル可ラサ
 ル者タリ因テ先ツ嶋根縣ニ照會シ其後來ノ習
 例ヲ亂シ併セテ船艦ヲ派シテ其地勢ヲ見若シ

外務省

夕務

彼既ニ著手セハ其宰政ノ模様ヲ実査シ然ル後
ニ其方略ヲ定メント要ス請フ速ニ株リテ議ス
ル者アラシキ事ヲ伏望ス

渡邊洪基立案印

鄙生嘗テ瀨脇君ノ露港雜誌武藤氏ノ同港記聞
ヲ閲見シ且其景況等傳業スルニ殊更感發興起
スルノ条件ハ即チ我カ皇國西北ノ屬嶋松島
ナルモノナリ熟々惟ミルニ今ヤ開國ノ際ニ當
テ各國ノ交際日ニ篤厚ニ進ミ月ニ隆盛ニ赴ク
ニ從テ國事百般自ラ冗費モ尠カラズ國産ノ輸
出モイマタ盛大ニ運ハカ國債モ亦解消スルニ
至ラス嗚呼コレ全國一般ノ憂患ニシテ之ニ過
越スル大患ナシ是ヲ補フハ富國強兵ニ在リ富

外務

強ノ基礎ハ仁恤ヲ施行シ萬民職事ニ尽カシ物
 産ヲ興隆シテ國家ノ裨益ヲ計ルニアリ其事ヲ
 行フ哉又緩急前後ノ別ナキ事能ハス故ニ鄙生
 從來此ニ着目シ日夜心膽ヲ碎キ夜々トレテ其
 要務ヲ索覓シ國家萬分ノ一ニ報イント欲スレ
 トモ如何セン短才不肖且微力ニシテ更ニ猷リ
 為ス所ナシ即今武藤氏松島ノ建白ヲ熟閱スル
 ニ其着手ノ順序以往ノ方向普ク至レリ盡セリ
 ト云フベシ實ニ方今ノ急務ニシテ擯斥シ難キ
 要件ナリ一日ヲクルレハ一日ノ損害ヲ生スル

如發小書

ニ至ラン呀謂先ズル時ハ人ヲ征ス彼ノ南方ナ
 ル小笠原嶋ノ如キモ既ニ着手ノ期ヲ稍失スル
 ニ似タリ而シテ此島嶼ニ比較スレハ松島ハ一
 層ノ要島ナレハ速ニセズンハ有ベカラス如何
 トナレハ北方ナル寒國人ノ觊候齟齬ニ陥レン
 事ヲ痛ム寔ニ至テ悔ルトモ及ハズ仰キ願クハ
 同氏之建議賢明之英断ヲ以テ只管 御裁用且
 速ニ御着手被為在度ト竊ニ企望イタス所ナリ
 固ヨリ卑賤ノ我輩苟モ不明之淺見ヲ以テ堂々
 タル廟議ニ関スル義ヲ撰リニ論説イタシ候事

外務省

戦慄恐懼ニ堪ヘザレ共聊微衷ヲ表シ有志ノ諸
君子ニ其著眼スル所ノ是非曲直ヲ正サン事ヲ
乞ント欲スルナリ

明治九年七月十三日

兒玉貞揚謹言

松島著午之楷携見込ニ

- 茅一 開拓人ノ蝸屋ヲ管ニ
- 茅二 伐木
- 茅三 開港場ヲ確定スル事
- 茅四 燈臺之建設
- 茅五 良材其他ヲ輸出スル事
- 茅六 土地開拓之事
- 茅七 置場ヲ定メ船用諸品ヲ蓄藏スル事
- 茅八 民屋ヲ管ニ殖民ニ及フ事

外務省

如
務
小
目

茅九 魚雁之用意ニ取リカ、ル事

茅十 作物之閑業

其他山川丘陵之業ニ運フ事

謹而上言ス 近生 不才鄙賤之身ヲ以テ方今國事
 之緩急施政ノ前後等素ヨリ察知スヘキニ非ズ
 シテ只不明之事ヲ建白候ハ戰慄恐懼ニ堪ス幾
 回カ閣筆候得共國家強盛之一助ト存込候ヲ點
 止候テハ是又本懐ニ無之止事ヲ得ス誠衰ヲ表
 シ候ハ即チ我カ西北ノ方ナル松島ト云フ一嶋
 之事ナリ 鄙生 兩三年前ヨリ露領ウラジワスト
 ヲクヘ三四度往返イタシ候ニ付其每度遠見セ
 シニ一塊ノ小島ナレトモ向來 皇國之裨益ニ

成へキ島嶼ニシテ却テ南方ナル小笠原島ヨリ
 モ一層專務之地ト卒忽被存候然ルニ一字之
 住民ナク一箇ノ耕地ナシ自然外人之洪益ト成
 行可申裁モ難斗遺憾不勘既ニ外人自在ニ伐木
 致シ船舶ニテ持去候事モ屢有之由兼リ候間尤
 ニ其大要ヲ掲ケ建白イタシ候也

我カ隠列ノ北ニ在ル松島ハ南北凡ソ五六里東
 西二三里ノ一孤島ニシテ海上ヨリ一見スルニ
 一字ノ人家ナシ此松島ト竹嶋ハ共ニ日本ト朝
 鮮トノ間ニ在レドモ竹島ハ朝鮮ニ近ク松島ハ

如
 務
 省

日本ニ近シ松嶋ノ西北ノ海岸ハ岩石壁立シテ
 断岸数百丈飛鳥ニ非サルヨリハ近ツクベカラ
 ス又其南ノ海濱ハ山勢海面ニ向テ漸次ニ平坦
 ニ属シ山頂ヨリ三四分ノ所ニ其幅数百間ナル
 瀑水アレハ平地ノ所ニ田畑ヲ設ケ耕作スルニ
 便ナルベシ又海辺諸所ニ小湾アレハ船舶ヲ繫
 クベシ加之本嶋ハ松樹鬱々トシテ常ニ深緑ヲ
 呈シ鑛山モ有ト云ヘリ既ニウラジヲストツク
 ニ在留スル米人「コーペル」ノ説ニハ日本ノ属嶋
 ニ松島ト称スル一島アリ未タ日本ニテ著手セ

外
 務
 省

サルト聞ケリ日本ノ牙轄タル嶋ヲ他國ノ牙有
 トナサハ英國ノ寶ヲ他國ニ授與スルナリ抑本
 島ニハ鑛山アリ巨木アリ且漁ノ益樵ノ益芋モ
 亦少カラス予ニ此島ヲ貸シ給ハラハ毎年大利
 ヲ得ント云ヘリ 迂生 又熟考スルニ樵漁ノ益ニ
 テモ多分ナレベケレトモ只樵漁ノ益ノミニ非
 サルベシ如何トナレバ此¹コーペルハ今現ニウ
 ラジラストツク^レニ在リ其家屋廣大ニシテ彼ニ
 勝ル商人ハ僅ニ兩三人ナル程ノ有名ナル商人
 ナレ共高業ヲ專ラトセス常ニ鑛山ノミニ心ヲ

夕
 務
 目

用ヒ多クノ滿洲人ヲ雇ヒ鑛山ヲ專ラトシテ居
 モノナルニ松嶋ニ金屬アルト唱フレハナリ 迂
 生 兩三年前ヨリ此海上ヲ三四回往返シテ船中
 ヨリ松島ヲ目撃セシニ鑛山アルヤ否ハ明白ナ
 ラサレトモ一見スル可ニテハ鑛山モ有ヘシ且
 滿島巨松森々トシテ繁茂シ又禿山ノ牙モアレ
 ハ鑛山家ノ見ル處ニテハ必ス鑛山ナラントミ
 ルベシ然レトモ 迂生 ハ其鑑定ヲ知サレハ鑛山
 ヲ以テ論セズ只希望スル可ハ彼嶋ノ大木ヲ伐
 リ其良材ヲ今盛大ニ開港スルウラジラストツ

夕
 務
 目

クニ輸出シ或ハ下ノ関へ送リテ賣却シ其利益ヲ得ニ又果シテ鑛山アル時ハ鑛山ヲモ関キ漢農ヲ植へ開拓シテ往々皇國ノ所有トナサハ莫大ノ利益トナラン既ニ朝鮮國ト条約ヲ結タル上ハ咸鏡道辺ニモ関港アリテ互ニ往復アルベケレハ必ス松島ハ其道路ニシテ要島ナリ加之彼我ノ船舶航海中難風ニ逢ヒ日教ヲ經テ霧水ニ乏レキ時ハ此島ニテ被泊スレハ甚便利ナリ且又ウラジヲストツク港追日益隆盛ニ至ルベケレハ各國ヨリ諸品輸出入ノ航海家モ難風

夕
示
不

ニ逢ヒ或ハ薪水ニ乏レキ時ハ本島ニ入港スヘケレハ一港ヲ関キ燈臺ヲ設クヘレ尤スレハ獨リ本朝ノミニ非ス各國航海家ノ安堵ニ帰レ皇國ノ仁意ヲ仰キ皇國ノ仁政ヲ感佩スベレ是レ所謂一挙ニシテ兩全ヲ得ル者ニシテ外ニ仁ヲ施シ内ニ利益ヲ得ルナリ且又日朝兩國ノ人民毎年漂流スル者頗ル多シ此人民ヲ助クルハ日朝兩國ノ仁愛加之各國ノ人民モ餘愛ヲ得テ皇國ヲ尊敬シ益交際ノ厚キニ至ルヘシ仰キ願フ所ハ此島ヲ関キ農民墾夫ヲ植へ物産ニ

十
務
省

精カヲ尽サレムルニ在リ 近生 兩三年來此海上
 ヲ航海スル事既ニ三四度ニ及ヒシニ一見スル
 毎ニ本嶋ノ南港ヲ思ハサルハナレ殊ニ昨明治
 八年十一月ウラジラストツクニ渡海セシ時ハ
 彼島ノ以南ヨリ難風ニ逢ヒ夜ニ入り松島ニ觸
 ニ事ヲ恐レ船中ノ衆人千辛萬苦スレトモ暗夜
 ニレテ且大風雨或ハ大雪トナリ更ニ此島ヲ見
 事能ハス如何アラント船中ノ衆人只大息ヲ奈
 シ歎スルノミノ事モアリツレハ先ツ急ニ此島
 ニ燈臺ヲ設立アラン事ヲ請フ

明治九年七月

武藤 平 学

或人ノ説ニ日本ヨリ今松島ニ予ヲ下サハ朝
 鮮ヨリ故障ヲ云シトイヘルカ松島ハ日本地
 ニ近クシテ古來本邦ニ属スル嶋ニテ日本地
 因ニモ日本ノ版図ニ入レ置タレハ日本地ナ
 リ且又竹島ハ徳川氏ノ中世葛藤ヲ生シテ朝
 鮮ニ渡シタレトモ松島ノ事ハ更ニ論ナケレ

事務 小目

ハ日本地ナル事明ナリ若又朝鮮ヨリ故障ヲ
 云ハ、遠近ヲ以テ論シ日本嶋タル事ヲ證ス
 ヘシ實ニ日朝往來ニ外國船北地ニ往復ノ
 要地ニシテ万国ノ為ナレハ日朝ノ内ヨリ急
 ニ良港ヲ撰ヒ先ツ燈臺ヲ設ル事今日ノ要務
 ナリ

夕
務
省

夕
務
省

取調局第五号

樹野陵島材木差押件

全

明治十八年七月二日

取調局調製